

大命将に終らんとするや悔懼こもく至る

大命将終 悔懼交至

不豫修善 臨窮方悔

悔之於後 将何及乎

大無量寿経

大命将終

「大命将に終らんとするや

悔懼こもこも至る。」

豫め善を修せず

窮るに臨みて方に悔ゆ。

之を後に悔ゆとも

将何ぞ及ばんや。」

それはまだ刑務所を監獄と呼んだ頃の工監獄に十年間勤務して、百五十人の死刑囚を取り扱った某氏の述懐である。

「旦那！ 俺は近い内に死刑れますわい。……なぜって、昨日今日は飯が喉を通りませぬわい。……どうも烏の鳴声が違いますよ。」

監房の前を通る看守たちにそう告げるのが大方であった。いよく、死刑の日が来る。死刑の言渡しがあつてから大概一年、司法大臣から死刑執行の電報がとどく。いよく、死刑執行の日が来ると、看守たちがつれに行く。その日であることがわかる。百人が百人、鉄の格子にたくさばりついて片手をはなせば片手、その監房を出まいとする。今日まで毎日、許された時間に運動場に出て散歩することを、まるで縛られた犬が放たれた時のように、あれだけ喜んで飛び出した監房だのに。しかし拒んでも逃げようとしても力の前には如何とも出来ない。両手を後に親指二本がかたくくくくられる。死刑だとわかった時、船に乗ったように、足の裏はもとにつかない。やつと助けられて刑場に歩む。絞首台の下には、すでに桶がすえてあるのが見える。

典獄、検事、書記、医師、教誨師等々がならぶ。

「何年何月何日、××控訴院にて判決申渡されたる死刑を只今執行する！」

典獄の宣告、その刹那から被告は、天を仰ぎ地に伏して、声を限りに泣き狂いつつ「どうぞ助けて下さい……。」と哀願する。死刑囚は引き立てられて刑場へ、そして絞首台の上に階段を登る、筵の上に座らされる。哀々たる許しを乞う声、腸をしぼる。気の弱い官吏は出席し得ないという。百五十人の死刑囚中この哀願をしなかつたものは、僅かに両三人であったという。

「遺言はないか。」寸陰の命すら延ばそうとする囚人たちは、一つ述べ二つ述べてやまない。教誨師が説教をする。しかし唯哀願歎訴の声のみで、おそらくは聞えないらしい。

やがて目がふさがれる。綱が首にかかる、「今一目、娑婆を見せて下さい。たった一分間でもいいのです。見せて下さい。」その声は血をはくよう。

辞世の歌を言わせる。大概の者が何とかいう。一秒でも長生きしたい心から、一句言う。

「まだある！」しかし、コトン、最後だ。

山桶を足で盛んにコトン／＼とつく。呼吸をしようと肩は波のように動く。しかし十分二十分その足もだらり、呼吸も絶える。

殺人強盗、彼がそれをなす日、この「大命将に終らんとするや

悔懼こもごも至る。」ことの百分の一でも考えたら……………」

「窮るに臨みて方に悔ゆ。之を後に悔ゆとも 将何ぞ及ばんや。」

何たる痛烈なる文字なるぞ。無自覚なる我らの最後を刺して完膚なし。

山田憲氏の最後

この話を聞いた私は帰るとすぐ、済世軍発行の「信に生きた人、山田憲氏の信仰」をもう一度出して読みふけた。彼は農商務省技師農学士であった。鈴木辨蔵を殺して死刑になった人である。七人の方々によって書かれた首五十頁の中からぬき書きして見る。

東京監獄の中での藤井教誨師と山田憲氏の対話からはじめる。

「山田さん、真田さんからの電報ですか。御差支え無かつたらお見せ下さいませぬか。」

「え、どうぞ」そう言つて、山田は手を伸ばして、机の上に開いたまゝ置いてある二通の電報を取つて藤井氏の手に渡した。

「散る桜、残る桜も散る桜」

「散る時が、浮ぶ時なり、蓮の花」

藤井師の額にある太い二三本の線は暗く動く。……………数日來の新聞は、春が暮れゆくと共に、山田も近いうちに梢から離れて、散りゆく花と共にその生命を断たれるということを書いて、ある一部の人々の心の同情を誘つた。……………真田氏も九州の旅路で、この新聞を見たのであつた、しかしてこの世の名残りに、せめては彼の生きているうちに、別れの言葉を送つて置こうと思つて、電報を打つたのであつた。

「藤井先生。ほんとうに散る時が浮ぶ時ですね。以前には、私のような者は終生浮ぶ時はないとあきらめていましたのに、先生の御導きによつて今でははつきりと仏の慈悲を知ることが出来ました。私は真田さんにも感謝致します。先生にも感謝致します。私の周囲の人達、私の運命を育て、くれたすべての者に向つて、私は今感謝したい気持ちになっています。」

「山田さん、私は貴方が今日のその御境地に達せられた御聰明に対して驚嘆せずにはいられます。貴方の御一生は確かに世の光となりましょう。」

藤井師は下を向きながら静かに云った。

「これも皆先生の御力で御座います。汚れたこの身このまま、如来の慈悲の本願に只管に頼り行く自信の出来ましたのは、先生の御人格の力で御座います。私は私自身の法悦の心を喜ぶと共に、先生に無限の感謝を捧げずには居られません。實際あの頃先生がいて下さらなかつた場合の事を考えますと、それは思つた丈でも私には怖ろしいことで御座います。あの頃の私の一歩前には身の破滅が大きな口を開いて私を待っていたのですから。私がそれから救われたことは、全く先生の御力です。」と言つて山田は声を呑んで了つた。

藤井師は言い出す時は今だと思つた。

「山田さん、私は昨日までは貴方の所へ、如来のお使いとなつて参りました。ほんとうに楽しい御座いました。それに引き換えて今日の苦しさは、山田さん。……………今朝は……………魔の使いとなつて参りました。」

「ええ？」山田は、ただ一言口を開いただけであつた。

「山田さん、長い月日の間御交際をさせて載きました。身にしてみても嬉しくあります。されど今日は愈々貴方と長いお別れを致さねばならぬ時になりました。」と言つて藤井氏は下をうつ向いてしまつた。

「山田さん、思えば長い間の御交際でした。私は今日まで足らぬ身とは思ひながらも貴方から師と呼ばれていました。されど今日からは貴方は私の師です。私は貴方の弟子です。」

藤井師の声は、声帯からんでよく出なかつた。山田はもう何時もの平静に帰つて、自分の前に、悲しいやるせない心で涙ぐんでいる藤井氏のために小さな声を立てて、「南無阿弥陀仏」と念仏を称えた。

「山田さん、私は貴方の遠いお旅立ちの日に、嬉しいお消息をする事の出来るのをせめてもの慰めに致します。山田さん、お母さんやお妹さんの御消息です。貴方の遠いお旅立ちの日に晴れのお衣です。」と言つて一枚の晴衣を出した。

「そうですか。有難う御座います。」と言つて、山田はその衣を手に取つてじつと眺めていた。彼の瞳はまつげの露で見えなくなつた。しかして彼の眼には六十の上にもなつた母の老いやつれた姿や、不幸な兄のために一生をつまづかせられてしまつた妹の姿が浮んで来た。しかして微かな燈火の下で、二人が涙に頬をぬらせながら、親は子を思う心、妹は兄を慕う懐しい心で一杯になりながら、されどもお互に黙り合つて死出の旅路に着く自分の今日の晴衣を縫つてくれた時の寂しい光景が思出されて来て、彼は今更に別離の悲哀をヒシヒシと胸に感じた。

「では先生、失礼して着替えますから」と言つて山田は寂しく立つた。而してその顔には自然な平和な微笑さえ浮べていた。着替え終つた山田は、嘆きに沈んだ藤井師に對して、

「藤井先生、私にはこの世の中が仮の世の中であるということが今判然と分ります。私はただ今お迎えの輿に乗つて寂光の輝く都へ行くのです。私の心には無明の闇か

らのがれたという感じが判然とあります。私は今喜びに充ちています。どうぞ先生、私の嬉しいこの日にその様に嘆いて下さるな」……彼は刑場へ歩みを運んで行った。

時計が十時を指した時、彼は身に新衣をまとうて、微笑さえ含んで、刑場の側なる阿弥陀堂に静かに歩みを運んだ。居並ぶ係官に一揖すると、野口典獄は涙ぐんでここに改めて本日執行の旨を言渡された。彼はただ「ハイ」とのみ首を垂れた。しかも報謝の称名は彼の口から絶えなかつた。その態度は少しも乱れず、また悪びれもなかつた。典獄は更に関係弁護士の希望として宮島弁護士よりの伝言を伝えられた。即ち、

一、人格者として立派な最後を遂げてくれ。

一、子供（みち子）の事は関係弁護士で十分心配するから安心せよ。

一、親戚一同はもちろん吾々関係弁護人も死後は十分菩提を弔うから大往生を遂げよ。

と告げられた。彼は一々首肯した。しかして最後に言々肺腑より出ざる言葉にて、犯せし大罪を懺悔し、かかる身に加わる情の厚きを心から感謝し、今や極楽往生まぢがいなき身となつて従容として死に就くことの出来る身の幸を感謝した。更自ら進んで「せめて死体を解剖に付せられ、学理上の資料ともなれば分外の幸である。」とて白紙に楷書で左の解剖願を認めた。

……死体解剖願を略す……

余は彼に懐中名号を授けて仏前に導き、読経後礼拝焼香せしめた。供物と茶をすゝめるとそれでは死出の首途にと、餅菓子一つと茶二杯に咽喉をうるおした。彼の従容として少しもせまらざる態度と又人間の心をしつくりとみつめていた事に涙ぐまざるを得なかつた。しかも彼は衷心より感謝しつつ、

「私は順調であつたら、あるいは世間的の名声を博したかも知れません。けれども臨終には如何ばかりか悶え苦しまねばならんだかも知れません。然るに今や逆縁が因縁となつて、極楽往生まぢがない身とならせていただきし事を心から喜びます。」

と、しきりに感謝の念仏をたたえた。その時、彼の顔にはいい知れぬ法悦が燃えていた。

「しからば、先生極楽でお待ち致して居ります。」

との言葉を残して静かに刑場に引かれた。

山田氏が四月二日愈々死刑場に引かれて行かれる時、一步一步はいかに厳肅なものであつたでありましょうか。その間の時間はいかに山田氏にとつては尊いものであつたでありましょう。桜の花は今を盛りに、上野、向島では世間さわぎのあるその裏に、ここ獄庭では、あたら嵐の前の花の如く物の哀れをとどめていたのであります。

花散る四月の二日、

典獄「何かこの際、言っておく事があれば、何なりと聞いて君の意志に添う様にし
てやるから………」

山田氏は微笑をもらし、やをら顔をあげ、一礼しつつ

山田「有難う御座います。別に申上げることはありませんが、私は只今は絶対他力の信仰に生きておりますから、今日の死は少しも恐れて居りません。私はあれだけの大罪を犯したのでありますから、今日あるは寧ろ当然のことと考えております。依つて今は人も恨みず、天も恨みず、従容として死に就く覚悟であります。何も申上げることはありませんが、この二年間、閣下をはじめ皆様方に一方ならぬ御厄介になりました。誠に有難く感謝いたしております。どうぞ皆様によりしくお願い致します。私は今はただ謝罪と感謝の外、何物もありません。どうぞ皆様によりしく願います。南無阿弥陀仏」

どこまでも真実なる自己の姿を見失わず、みにくき自己の弱き心を弥陀の弘誓の船に托せられし心は、今や弥陀の心と一味になったのであります。

大最後！

典獄「今やどうでしょう。」

山田、莞爾として

「今は全く平常と同じです。少しもかわりはありません。私はこの事がなかったら吃度、物質に斃れたに相違ありません。今日精神界に生きることが出来て死ぬのは実に感謝に堪えません。」

愈々用意万端調いたれば、わずかに三十二歳の花の蕾をあたら刑場の露と消えん間際も、

山田「皆さん御免なさい。南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏」

ゴトン

嗚呼、ついに山田憲氏の肉は永遠に逝つた。しかし魂は永久に甦る。時に大正十年四月二日午前十時四十六分、天は曇る。

絶対他力の大道に一身を托し、私有の山田氏は亡び、公有の山田氏が生まれました。私有の仏陀は亡び、公有の仏陀が生まれました。私有の親鸞聖人は亡びて、公有の親鸞聖人が永遠に生まれました。

彼は死に際して何の遺言もなく、又辞世の句も残さなんだ。また特に声高らかに念僻も称えなんだ。たゞ自然のまゝに、そこに何の飾つたところもなく、少しのりきんだ跡もなく、寂漠の情もなく、恐怖の念もなく、法悦に充ちて平生のまゝに死を見ること帰するが如くであった。

大無量寿経ノ会座將ニ終ラントスルニ際シ

仏、弥勒ニ告ゲテ曰ク

為得大利 為失大利

大悲ヲ信ズル者ハ即チ大利ヲ得、

信ゼザル者ハ即チ大利ヲ失フト。

不肖、天下ニ罪在ルモ、本願ハ悪人ヲ正機ト喚ビ給フ。

ココニ至ツテ、報謝ノ称名相続セザラント欲スルモ、豈ニ得ベケンヤ。

嗚呼有難哉。煩惱即菩提ノ境。

彼はこうした手紙を数氏に送った。それが地上の最後の名残として。

以上は山田憲氏に関するものの抜書である。悪人山田憲、罪を犯して、聖者山田憲、死刑となる。国法は彼の肉体を死刑となし得るも、彼は遂に何ものよりも超越して自由であった。彼はよく彼に還ったが故に、彼は彼を超越した。我を真に超越するものこそ、真に我に生きるのである。多くの死刑囚は最後まで何故に二重の苦を苦しまねばならなかったか。多くの死刑囚が遺言を辞世を残すのに、彼は何故にそれを残さなかったか。考えることの多い二つの世界である。ああ、大道なるかな。